

1. テキスト

「内部知覚について」「七」の第2・3段落。131頁6行目から133頁8行目まで。

2. テキスト解釈

（第2段落）

本体を知るといえば、古い形而上学と思われるかも知れぬが、本体とは主語となって述語とならないものとするならば、我々が物を知るといふのは、かかる本体と合一することであり、真理は知るものと知られるものとの合一にあると考えることもできる。

「古い形而上学」とはカント以前、即ち批判哲学以前の主としてドイツの形而上学を指す。こうした形而上学は思惟（証明）によって物（本体・実体）の本質を知ることができると考えていた。この「物」ないし「実体」には魂、世界（宇宙）、神も含まれていた。また「真理」を「知るものと知られるものとの合一」とするの、「古い形而上学」の基本的な考え方である。カントの批判哲学はこうした形而上学の在り方に有罪判決を下したのである。ところが西田は、自らの思想がこうした「古い形而上学」と同じであると「考えることもできる」とし、それとの類縁性を一応認める。

したがってそれは真理や「客観性」を「主観の構成」（カント）や「思惟の当為」（フィヒテ）の内に求めるカントやフィヒテの哲学とは異なる、そのように西田は考える。しかし西田は「真理」や「知識の客観性」というものが「古い形而上学」がなしたように、ヘーゲルのいわゆる「悟性」的な思惟による証明によって明らかにされるのではなく、「我々が判断するもの、即ち判断の主語となるものとの合一、即ち客観的なるものの中に没入することによって、知識の客観性の意義が明にせられ得る」と考える。

「判断するもの」はさしあたり認識主観ではなく、「判断の主語」であり「客観的なるもの」である。以前にも「色が色自身を見る」（104, 1-2）という表現があった。それと同様に主語が判断するのである。しかしこれは擬人的な表現ではない。「客観的なるものの中に没入することによって」現成する。と言っても、単なる主客合一ではない。単なる主客合一ならば「内部知覚」において成立している。しかし内部知覚ではどこまでも「現在」に届かない。「確信」に止まって「明白」に至らない。「内部知覚」は反省に齎されなければ明らかにならないからである。ここには「立場の超越」（80, 12）がなければならぬ。ここには「現実的なるものと、何處までも超越的なるものが一つ」（83, 7-8）であり、「自己は現在に於て自己自身と合一すると共に、自己を超越して居る」（同 13-14）という矛盾した事態が成立していなければならない。これは物を向こうに置いてこうした物に成り切る、ということではなく、「作用の作用」と言われる「自覚」の事柄である。と言っても、これも作用を反省して自覚するというのではない。丁度、英国にいて完全な地図を描く時のように、描いている自分を含んだ完全な地図など何時まで経っても描けないが、完全なる地図はそのつど描こうとする、そこに現成している（そうでなければ地図を描くことさえできない）、そのことに気づく。それと同じように、どこまでも反省してもたどり着くことのない反省の営みを破ってそのつどそこに現成している「現在」に目覚める（直覚）ということがある。これが「作用の作用」としての「自覚」である（因みにキーネーシスの中にエネルゲイアを見るときと同じことである）。ここに「確信」ではない「明白」が成立している。そうしてこの「現在」が上で言われた「超越的なるもの」であり、「客観的なるもの」、即ち「物」である。

これは例えば、我々が反省の中に閉じこもってぐちゃぐちゃ考えている時に、そうした反省を破って蛙が飛び込む水の音を聞いて静かさに目覚める時や、垣根のナズナに驚かされる時のような、視点の転換によって立ち現れて来る「物」である。「物」であるから、「客観的」であるが、それは同時に「現在」であり、自分自身でもある。成り切っているからである。このことは「我が実在に帰する」とも言われ、「我々はいつでも全然我を没し尽して、主客合一となる所に有を見る」（107, 14-15）とも言われていた。

この「有」即ち「客観的なるもの」の行う判断は同時に認識主観の判断でもある。それ故それは自己の表現であり、一々が創造であり、そこに自由もあることになる。まさに「随处に主

と作る」(臨濟)である。

成り切ると言っても、個々の「物」に、例えば集中するというような仕方で成り切るのではない。「古い形而上学」がそうであったように、この「物」は魂であり、世界であり、神でもある。個々の目的としての「物」に成り切るとは日常的に経験される。我々は目的を次から次へと設定してこうした経験を繰り返す。ここで言われている「物」ないし「客観的なもの」とはそうした個々の「物」のことではない。そうした個々の目的が全体として崩落したところに立ち現れる「物」、「古い形而上学」が問題にしたような究極的な「物」即ち神である。そうしてそれが同時に「真の自己」ということになる。「物」「客観的なもの」「神」「真の自己」、それらはすべて「現在」の別名である。

これとは逆に所謂「物」以前と考えられる、「空間の認識」も「色の判断」も我々がそれに成り切ることによって「古い形而上学」とは違った意味で「本体の知識」となり得る。元來幾何学的図形がそこにおいて成立する基体としての「空間」も、色の変化がそこにおいて起る「色」そのものも目に見えるものではない。しかもそれなしには幾何学的図形も色の変化も成り立たない。西田はそれらを外に客観化・実体化する(古い形而上学)のでもなく、主観的な形式とする(カント)のでもなく、主観的な判断が破れたところで判断の主語に成り切ることによって成立する主観的にして客観的な「本体の知識」であると考えようとしたのである。さらに「空間、時間、因果の法則によって構成せられた所謂実在界」も同様に「主語となって述語とならない」「判断の主語」に成り切ることによって、「実在である」と考えられるとしている。

ここでも西田は「空間」「色」という一般者(「具体的一般者」(124頁12行目、126頁10行目等)と呼ばれたもの)と「所謂実在界」とを区別している。前者はなお「一般者」として例えば個物の性質となり得るが、実在界はそれ以上の主語を持たないがゆえに「唯一の実財界」と考えられる、というのであろう。

(第3段落)

前段落では「物を知る」とは「本体と合一」することであることが述べられたが、この段落では、同じことが「知るということは、自己の中に自己を映す」こと、「自己が(自己において)自己自身を見る」ことであると言われる。この「思惟の思惟」ともいうべき在り方が「知るといふことの最も完全な形」とされる。

「映す我より云えば構成する」と言え、「映された我より云えば主語となって述語とならない超越的なものに合一すること」であるとされる。「映す我」と「映された我」の関係は〈真の自己〉ないし〈神〉と〈個人的な自己〉の関係と考えてよいであろう。あるいは〈直観〉と〈反省〉の関係と考えてもよい。〈個人的な自己〉は「超越」を介して、つまり自力ではない仕方で「超越的なもの(働くものの基体としての知るもの：引用者)に合一する」。合一することによって、自ら「映す我」となると同時に、自らを「映された我」として、個別的な我、相対的で有限な我として見出すことになる。個別的な我が同時に極大の我であり、極大な我が同時に個別的な我であるという関係がここにはある。

「構成する」とは判断によって限定すると考えてよい。少し後には「カントの所謂経験界を構成する認識主観」という語が見える。しかし西田の立場からすれば「構成」とは物に成り切った認識主観が自らを限定すること、換言すれば「特殊化(個別化)」することである。それは単に法則などとして「形式の特殊化」を行うということに限られない。歴史的事実のような所謂「事実的知識」といった「内容の特殊化(個別化)」を行う。これは如何なる個別的な内容においても自己自身を見る、ということである。

そのようにして見出されたものが「映された我」である。「映された我」は「映す我」によって見出されることによって初めて「映された我」となる。このことの意味を考えなければならない。

個人的自己は自らが相対的・有限的・特殊的・個的でありながら、そのことを覚知していない。自らが絶対者である、少なくとも可能性としては絶対者になり得ると思っている。人間は自らがネズミやウィルスと同じ人間という特殊な命であることを覚知しない。あるいは路傍の石同様、一個の存在であるにすぎないことを覚知しない。人間はそうした存在と同様に(互いに争いながら)共存していかざるを得ない存在であることを覚知しない。しかもそうしたことを人間が努力して覚知できるということでもない。畢竟人間は自らが「人間にすぎない」ことを自力では悟りえない。「汝自身を知れ」とは古代ギリシャにおけるデルポイの神託であったが、それは神ならぬ人間の身の程を知れ、という意味であったという。そうした「知」も人間

の努力によって得られると考える所に身の程を知らない人間の知の本性(傲慢・尊大)がある。

人間が自らの相対性・有限性を知るのは、人間が人間を超えたものに照らされ・包まれ・映されることによる外はない。それによって人間は相対的・有限的なままに絶対・無限に摂取せられ、絶対・無限となって自ら映すものとなり、映された我を自覚することになる。これが「(自己が)自己の中に自己を映す」ということ、「自己が(自己の中に)自己自身を見る」ということに他ならない。自らの反省によって自分が相対的・有限的であるとするのは卑下という仕方での最大の慢心(卑下慢)である。

かくして「映す我」が個別的な自己を「構成」することが、同時に個別的な自己(「映された自己」)が「超越的なものに合一」して、その内に「映された我」として自らを見出すことなのである。

次いでテキストは「構成するもの」と「見るもの」が「一」でなければならぬと言い、「単に見る眼」に止まり、自らを特殊化しない立場を批判している。これはすぐ出て来るカントの認識主観や、第4段落と同じように「単に見る眼」という言葉を使って批判している「現象学」の立場を念頭に置いている。西田はあくまでも自らを特殊化するという仕方でも個々の物・自己に成り切るということを問題にしているのである。しかし、すでに述べたようにそれは個人的自己がそのまま自らの目的(個人的自己はそのつどの目的を自己として成り立っている)に没頭するという仕方でも物に成り切るということではない。むしろそうした個々の目的が総じて崩落した虚無の深淵を潜り抜けたところから個々の物・自己に成り切るということである。

物(「知るもの」としての基体)に成り切りつつそこから判断として特殊化を行う、それが「認識主観によって事実的知識の客観性を立する」ことになるのである。「所謂経験界を構成する認識主観は自然の自覚でなければならぬ」とは「行為的主観」が「自然」に成り切り、その自覚として「自己の中に自己を省みる」ということである。

こうして「知るものは、すべてを自己の内に於て知る」と言われる。「物理的世界の本体というも、感覺的性質の変化の基体として、知覚によって直接与えられたるものでなければならぬ」というのは、赤から青に色が変化する時、目には見えないがそこに、赤でもなく青でもなく、赤でも青でもあるような「色そのもの」が直観されている、ということである。こうした「色そのもの」に成り切る。我々は常に「これは赤だ」というように、色を限定しているが、そうした働きの基に常に「色そのもの」があることに気づく、という仕方でもそれに成り切るということである。それによって「明白なる知識を有つ」ことができる。とされる。「物理的の本体は知覚の中に含まれて居るのである」における「知覚」もかかる意味における直観を含んでいる。

次に出て来る「所謂内部知覚」であるが、西田はそれを以前自らが「直接経験」と呼んだものに相当すると考えている。「直接経験」は「現前の意識現象とこれを意識することとは直ちに同一」(『善の研究』岩波文庫改版66頁)とされていた。ところがここでは「所謂内部知覚といえども、必ずしも我々が対象に直接して居るのではない」とされる。「現前の意識現象」を「意識」することはやはりそこに「反省」を含むということが、ここでは言われている。

現前のペンを見ている時に、ペンの存在が疑えないのは、現に見ているからである。現前のペンとそれを見ていることが切り離せないからである。しかし厳密に考えるならば、ペンを見ていることを意識した時にはペンは見えていない。見ている自分を意識している。この微妙なズレに対する反省がこの論文にはある。直接経験は結局のところ反省なのである。したがって「対象との一致は…達することのできない極限点」ということになる。そうして「真に対象其者に合一した内部知覚といえ、所謂省みられた自己を離れた立場でなければならぬ」とされる。その立場こそ反省が破れたところに成立する直観ないし自覚の立場である。歴史的事実のような「事実的真理」も数学のような「永久真理」も「皆此立場によって成立するのである」。

3. 哲学的問い

我々は誰も自分を「人間」だと思っている。では「人間とは何か」と問われると、誰も分からない。では人間は何故自分が「人間」だと思えるのか。